

研究テーマ

厚岸湖畔におけるアッケシソウの植生分布

及び植生環境に関する研究()

厚岸町立真龍小学校(北海道教育大学大学院教育学研究科) 内山 博之

本研究では、厚岸湖に注ぐ3つの大きな河川の河口域に広がる塩湿地に生育するアッケシソウの植生分布を調査した。アッケシソウが1年草ということもあり、特に昨年度の分布状況の違いや変化について調査した。

イクラウシ川左岸に見られていたアッケシソウは、5つあった小さな群落の2つが消滅していた。残りについても点在化している状況であり、今後も危機的な状態であるといえる。河口部に分布していたアッケシソウについても激減していた。イクラウシ右岸については、大きな変化は見られなかったが土壌の表面にミズゴケ類が多く見られ、周りには、ヒメウシオスゲが多く分布していた。

東梅川左岸では、昨年同様に池状地の砂洲に生育が見られた。しかしながら、その場所は3つの小さな群落があり、そのうちの2つの群落は、栄養成長の状態がよく、大きなアッケシソウであったが、個体数がかなり激減していた。河川近くには、新しく砂地の内側の土手に25cm程度の大きなアッケシソウが自生していた。この場所については、昨年自生しなかったところに偶然出てきたこともあり、次年度この場所にアッケシソウが自生するかどうかは疑問である。東梅川右岸については、昨年小さな点在化したアッケシソウの分布地がほとんど見られず、全体的に分布地の大幅な減少が見られた。

トキタイ川左岸(猫の沢地区)では、3つの大きな群落のうち1つが消失し2つになっていた。また、トキタイ川右岸(金田崎地区)については、主要な群落について大きな変化がなかったが、全体的に植被が高い場所が少なくなってきており、群落の散らばりが見られた。Be1t調査では、測量起点から55m前後、83m~85mの間に分布している。この場所では、若干の分布の広がりや植被率が上がっていた。

植生環境の調査では、植生地近くの塩水のphがややアルカリ性であり、塩分濃度も海水よりやや低めであった。また、土壌phについては、4~6までの酸性土壌であることが検出された。土壌分析での窒素や有機物含量等が測定できず今後さらに調査しなければならないが、今回の環境調査や測定によって、アッケシソウの保護・増殖に向けての手ごたえを少しずつ感じている。

今後、厚岸の保護・増殖の基本データとしてのアッケシソウは、金田崎に自生しているアッケシソウとすることを提言したい。なぜならば他の湖岸より外からの影響度を考えると低く、現地に近い環境条件で育成するのが最適であると考え。アッケシソウを育成するためには、土性は、粘土質にすることである。また、土壌phを5.8に保つことである。